

〔研究ノート〕

リセ・コンドルセの教師たち：
プルーストの時代のフランス古典中等教育の一側面
(前編)

横 山 裕 人

はじめに

1880 年前後、フランスの中等教育は大きく変容する。専門中等教育の発展や女子中等教育の創設が、これまでの主役であった古典中等教育の地位を脅かした。古典中等教育自体の存在意義が問われ、古代ギリシア・ローマ世界から継受した人文主義的教育理念が揺らぐ。それがレトリック教育と古典語教育の変化に直結した。1880 年 8 月 2 日のカリキュラムは、レトリック理論の学習に文学史の学習を置き換え、古典語の学習開始を遅らせ、ラテン語作文練習を削減した。教室で講読される作家リストにも新風が吹き込んだ。これは突然の変化ではない。実はそれ以前から古典中等教育は壁に突き当たっており、とくに地方のリセやコレージュではカリキュラムを実現できないケースが増えていた。第 2 帝政崩壊後に開始された中等教育改革は、挫折を経ながらも、共和派政権が安定する 1879 年以後再始動し、強力に推進されようとしていた。

こうした時期に、作家マルセル・プルースト (1871.7.10 - 1922.11.18) はパリのリセで学んだ。パリのリセは古典中等教育の花形でありフランス全国から優秀と目された教師を集めた。これらの教師たちは中等教育改革にどう対処したのか。教師の側の対応は、彼ら自身の境遇、教育や経験などにも左右されるだろう。政策の変更で教員全体の意識や行動を一挙に変えられるわけではない。学校は、時計のように精密な機構でもなければ軍

隊のように統制が行き届いた組織でもないからである。それを問うには制度史的なアプローチだけでなく、個人あるいは集団としてプロフィールを解明し比較する必要がある。

プルーストのリセ時代に的を絞った研究¹は、主に教師と生徒を一对一の関係で限定的にとらえ、学校という場自体を十分に見て来なかった。本稿は、これまでのプルースト研究の世界では知られていない史料や研究成果を参照しながら、1880年代のリセ・コンドルセの教師たちを集団的にとらえ、中等教育改革の浸透度を見極めたい。これによって、プルーストの受けた教育をより鮮明に描けるだろう。

教師陣のプロフィール

リセ・コンドルセは、共和暦11年実月23日（1803年9月10日）のデクレで、パリの他の2校（アンリ・カトル、シャルルマーニュ）とともに創設された。当初の「ショセ＝ダンタンのリセ」という校名は、時の支配体制の色合いを反映して改名を繰り返す。ボナパルト（帝政期と百日天下、第2共和政・第2帝政期）、ブルボン（王政復古期と七月王政期、リセという名称自体が王立コレージュに置き換えられた）、コンドルセ（1870-1874）、フォンターヌ（初代ユニヴェルシテ総長の名。1874-1883）と変化し、1883年1月27日リセ・コンドルセの現在の校名に至っている（以後、名称の変更に応じた書き分けは教員の履歴を見る上で煩雑になるので、どの年代でも一貫してコンドルセ校と記すことにする。パリの他のリセも同様に、1880年代の名称を基準とする）²。

-
- 1 哲学級の教師だったアルフォンス・ダルリュに関する研究を除けば、以下の研究がほとんど唯一の研究である：Ferré (André).- *Les Années de collège de Marcel Proust*.- Paris : Gallimard, 1959.- (Vocations; 8).
 - 2 リセ・コンドルセの歴史については以下を参照した。:
Lefeuvre (Charles) - *Histoire du lycée Bonaparte (collège Bourbon)* - Nouv. éd.- Paris : Bureau des Anciennes Maisons de Paris sous Napoléon III, 1862.
Chauvin (Victor) - *Histoire des lycées et collèges de Paris; suivie d'un appendice sur les principales institutions libres et d'une notice historique sur le Concours général depuis son origine jusqu'à nos jours*.- Paris : Hachette, 1866.
Centenaire du lycée Condorcet (Bonaparte - Bourbon - Fontanes), 1804-1904 : livre d'or.- Paris : impr. H. Bouillant, [1904]. [以下 *Centenaire* とする]

校舎は、繁華街グラン・ブルヴァール地区に隣接していた。1870 年には 1500 名を突破するほど生徒人数が膨れ上がる事態に陥り、低学年層を収容する別校舎 (petit lycée) の必要性が高まった。1880 年にプチ・リセが、ローマ街とヴィエヌヌ街の交差点角にあった建物の空店舗に設けられた³。1883 年になってプチ・リセはアムステルダム街 61 番地の製材所跡地に建てられた新築の建物に移された (現在のコレージュ・コンドルセの地)。1882 年 10 月に第 5 年級に入ったプルーストが最初通ったのもプチ・リセと考えられる⁴。1883 年の第 4 年級進学時から、コマルタン街の本校舎に通うようになったのであろう。

当時のカリキュラムでは、古典語ばかりでなく、哲学、歴史・地理、現代外国語、理系の諸科目も教えられていた。したがって相当の教員数がいいたのだが、本稿はフランス語・古典語系教員に絞って論じよう。

さて、プルーストが在学した 1880 年代のリセ・コンドルセの教員を調べ出すためには、当時の『公教育職員録 第 1 部』を見るのがもっとも簡便である。1881 年版から 1887 年版まで (上級の第 3 年級からレトリック級は 1889 年版まで) のデータを利用することにした⁵。

こうして検出された第 5 年級からレトリック級の文学・語学教員はのべ 47 名にのぼる (これに校長 1 名と教頭 4 名を加える)。彼ら一人一人の伝記的情報を集めるためには、公教育省関係史料を国立古文書館 Archives nationales で当たるべきであるが、本稿では、近年デジタル化されたレジオン・ドヌール勲章受勲者史料のオンライン・データベース *Léonore*⁶ を

Dupont-Ferrier (Gustave).- *Les Écoles, lycées, collèges, bibliothèques : l'enseignement public à Paris*.- Paris : Laurens, 1913.- (Les Richesses d'art de la ville de Paris).

3 Dupont-Ferrier, 1913, p. 143; *Centenaire*, p. 19.

4 古典中等教育の文法課程の最初の学年は第 6 年級だが、プルーストとはばしている。なお、学年の呼称は、高学年に上がるにつれて数が小さくなり、第 1 年級は 1902 年までレトリック級と呼ばれていた。

5 *Annuaire de l'Instruction publique*.- Paris : Delalain, 1851-1932. この内、1881 年版 p.103-104 ; 1882 年版 p. 93-94; 1883 年版 p. 97-98; 1884 年版 p. 97-98; 1885 年版 p. 97-98; 1886 年版 p. 87-88; 1887 年版 p. 87-88; 1888 年版 p. 86-87; 1889 年版 p. 86-87. 各版とも 3~5 月時点での状況を反映している。

6 <http://www2.culture.gouv.fr/documentation/LÉONORE/recherche.htm>
Ch はシュヴァリエ章、Off はオフィシエ章 (日付は叙勲のデクレのもの)、EC は出生関係書類、RS は受勲後に賞勲局に提出された履歴書類、AD は死

用いることにした。教職の永年勤続者も叙勲対象となるため、検出された人物の大多数をカバーしている（教員 35 名と校長・教頭の 5 名）。これによって、生年月日・出生地・両親といった出自に関するデータと教歴などの履歴のデータを得ることができた。これに様々な刊行史料⁷のデータをできるだけ突き合わせた。

プルーストが教わった教員のうち高等師範学校出身者については、その同窓会誌⁸に掲載された追悼記事も利用している。学友・同僚あるいは元生徒という近い眼をとおして見た教師の姿が鮮明に写し出されるだろう（むろん幾分かは中世の聖者伝のようなアウラもまもっているだろうが）。

次に重視したのは、教員の知的活動を示す著作に関する書誌情報であ

亡関係書類とする。

- 7 SHE の研究者が中心となり編纂した以下の教育史人名事典シリーズ (*Histoire biographique de l'enseignement*) を参照した。[] 内の略称を使用：

Charle (Christophe).- *Les Professeurs de la faculté des lettres de Paris : dictionnaire biographique.*- Vol.1, 1809-1908.- Paris : INRP, 1985. [Charle1]

Charle (Christophe).- *Les Professeurs de la faculté des lettres de Paris : dictionnaire biographique.*- Vol.2, 1909-1939.- Paris : INRP, 1986. [Charle2]

Caplat (Guy), éd.- *Les Inspecteurs généraux de l'Instruction publique, 1802-1914.*- Paris : INRP, 1986. [IGIP]

Charle (Christophe). Telkès (Eva).- *Les Professeurs du Collège de France : dictionnaire biographique, 1901-1939.*- Paris : INRP, 1988.

Condette (Jean-François).- *Les Recteurs d'académie en France de 1808 à 1940. Tome 2, dictionnaire biographique.*- Lyon, INRP, 2006.

さらに、高等師範学校出身者、アグレガシオン合格者、さらにリセ・ルイ＝ル＝グランの教員経験者については、それぞれ以下の書を参照した。

L'École normale (1810-1883): notice historique, liste des élèves par promotions, travaux littéraires et scientifiques.- Paris : L. Cerf, 1884.

Chervel (André).- *Les Lauréats des concours d'agrégation de l'enseignement secondaire, 1821-1950.*- Paris : INRP, 1993.

Dupont-Ferrier (Gustave).- *Du collège de Clermont au lycée Louis-le-Grand (1563-1920). Tome 3, Mémoires justificatifs, appendices, index général.*- Paris : de Boccard, 1925. [DF3]

なお、教員の履歴で、ENS 数字は高等師範学校合格年を、Ag と数字は各種アグレガシオン合格年を示す (AgL 文学、AgGr 文法、AgPh 哲学、AgH 歴史の各種別を示す)。

- 8 *Association des anciens élèves de l'École normale supérieure. Annuaire.* [以下 AssENS とする].

る。フランス国立図書館のオンライン総合目録⁹（一部の古典の作家家については冊子体の目録も使用）などを用いて、教科書・参考書の刊行を出来る限り調べている。

以上の情報源に加えて、旧フランス国立教育学研究所 Institut national de recherche pédagogique (INRP) の教育史部門 Service d'histoire de l'éducation (SHE) の研究者が中心になって構築してきたデータベース *Ressources numériques en histoire de l'éducation* の成果をオンラインまたは冊子体で活用している¹⁰。

校長ジラル

プールの学んだ時代、校長職を務めていたのが、ジュリヤン・ジラルである¹¹。フランスの植民地（現海外県）グアドループで生まれたジュリヤンは、9歳でパリに送られ、ラブルス寄宿学校 Institution Labrousse に入り、コンドルセ校に通学した¹²。レトリック級（1839）と哲学級（1840）でコンクール・ジェネラルの最優秀栄誉賞を獲得、1840年に高等師範学校に1番で合格、1841年には文学士号も1番で獲得、1843年に文学アグレガシオンも1番で獲得している。まさに秀才中の秀才である。地方勤務（プールジュ）を1年で済ませ、1844年から10年ほどコンドルセ、シャルルマーニュ、アンリ・カトル、ルイ＝ル＝グランなどパリの学校を転々とする。ようやく1854年10月にコンドルセ校に落ち着き、1868年まで同校のレトリック級を担当した。その間1865年から1868年まで高等師範学校のラテン語講座も担当している（1865年1月16日から担当、1865年8月12日正式に講師任命¹³）。1868年9月からルイ＝ル＝

9 CGBN と以下記す。http://catalogue.bnf.fr/index.do

10 http://rhe.ish-lyon.cnrs.fr/

11 Ch, 1860.8.11, ; Off, 1874.3.4. *Léonore* LH/1144/82 (#2 RS (1874), #6 EC). DF3, p. 85-86#13; IGIP, p. 378-379 (生年を1810とするがこれは誤記)。なお同時代にギリシア文学の専門家であり文科大学教授となったジュール・ジラル (1825.2.24 - 1902.3.30. ENS1844, AgL1847 <CharlesI >) がいて、しばしば混同されることがあるので注意。ちなみにジュリヤンの息子ポール・ジラル (1852.3.23 - 1922.7.1. ENS1872, AgL1875) も、ギリシア文学を専攻しパリ大学文学部教授となった<CharlesI >。

12 Lefeuvre, p. 107, 261; IGIP, p. 378.

13 *Bulletin administratif du Ministère de l'Instruction publique* [以下 BAMIP と

グラン校の校長を務め、プロイセン＝フランス戦争やパリ・コミューヌの難局を乗り切ったあと、1878年9月コンドルセ校の校長となった。1892年7月25日の引退まで14年弱の在任は歴代校長のなかで最長であった¹⁴。

ジラルルは、1878年パリ大学区評議会委員となっている。このほか、公教育省の各種の委員会、とりわけカリキュラム改訂検討委員会に参加し、1874年カリ¹⁵や1885年カリの改訂にも関与している。

一方、ジラルルの公刊した著作は多くはない。古典著作家の教科書版¹⁶には、キケロー『スキープオーの夢』（L26）、『カティリーナ弾劾演説』（L31）、『友情について』（L32）（同社、1855）、リーウィウス『ローマ建国以来の歴史（第21書・第22書）』（L42）、『同（第23書-第25書）』（L43）、歴史書の演説抜粋集である『コンシオネス』（L62）があり、これらの多くのものが版を重ねている。フランス語著作家では唯一、フェヌロンの『死者たちの対話』教科書版（F41）がある。これ以外には、ピエロ＝ドゥゼイニー Pierrot-Desseilligny（1792.11.15-1845.2.5. ENS1810. DF3, p. 83-84#7）編纂の作文問題集 *Recueil de discours, narrations, lettres, lieux communs, développements historiques...*（初版アシェット社、1831 編者無署名で刊行）を改訂して *Choix de compositions françaises et latines... des meilleurs élèves de l'Université moderne*（アシェット社、1860）を刊行し

する]、t. 3, no. 52, p. 24; t. 4, no. 74, p. 159. なお、講師正式任命を DF3 は9月12日とするが誤記。

14 校長リストについては以下参照：Dupont-Ferrier, 1913, p. 133, 137, 143.

15 1873年7月30日設立のカリキュラム改訂検討委員会は、公教育相バトビを委員長、パリ大学区長代理ムリエ、4名の公教育高等評議会委員、パリ大学区視学官2名、ファキュルテから2名、ノルマルから2名、パリのリセ校長5名、リセの教授2名、中等教育局長の計20名から構成<BAMIP, t. 16, no. 310, p. 480-481; t. 16, no.316, p. 682-683>。

16 本稿（次号掲載部分）の付表2「カリキュラム指定著作家とコンドルセ校教師の教科書版」を参照。F41やL26は付表での整理番号（仏語F、ラテン語L、ギリシア語Gの順）。この付表から同時にカリキュラム（1874年（1878年改訂には*を付す）、1880年、1885年、1890年）ごとに指定著作家がどの学年に配当されているかがわかる。カリキュラムのデータはアンドレ・シェルヴェルの研究に依る<Chervel (André).- *Les Auteurs français, latins et grecs au programme de l'enseignement secondaire de 1800 à nos jours.*- Paris : INRP, 1986.>。

ている。

ジラルルの教育方針は、伝統的な教育理念に忠実なものであった。このことは、中等教育改革を促す一連の動きに対するジラルルの反応から浮かび上がってくる。公教育大臣ジュール・シモンが全国のリセ校長に送った 1872 年 9 月 27 日の通達は、仏文羅訳など *thème* の練習についても 1 章を割きその欠陥を指摘した上で、*thème* 練習の削減を求めている¹⁷。これに対しジラルルは、1873 年 1 月 22 日のルイ＝ル＝グラン校教員全体集会で、「第 4 年級・第 3 年級で仏文羅訳をこれ以上長くは完全に廃止させたままにはしないことで、大臣の御意志の達成をお手伝いできると確信した」¹⁸と皮肉り、同年 10 月のレトリック級から第 4 年級までの教師の集会でも次のように述べている：「実際には、生徒たちは毎日フランス語を勉強している。羅文仏訳 *version latine* や仏文羅訳 *thème latin* をやりながらだ。その結果、フランス語の教育は、特定の練習の対象にはならないが、恒常的に教室で行われているのだ。」¹⁹

さらに、このように古典語を優先するジラルルの教育方針は、1873 年 9 月 18 日の大臣通達に付された、1872 年 9 月 27 日の通達の主要措置見直しを求めるパターン報告書に反映されている²⁰。

フェリー改革でも、ラテン語演説やラテン語詩作といった練習の廃止が一つの焦点になっていた。1879 年 1 月 28 日、恒例のコンドルセ校同窓会の祝宴に主賓として招かれた新校長ジラルルは、ラテン語詩作などの廃止を唱えるエルネスト・ルグヴェ（1807.2.14 - 1903.3.14. アカデミー・フランセーズ会員、コンドルセ校同窓会長）の 2 年前のスピーチに対して、こうラテン語詩作を擁護している：

この詩 [ラテン語詩作] は、私たちの教える若き生徒がそれを模倣しようと試みた時、もっとよく理解できるようになるのですから、彼らの想像力、それは、成長し、鍛錬され、柔軟になるために努力と格闘を必要とするのですが、この彼らの想像力がラテン

17 *Circulaires et instructions officielles relatives à l'Instruction publique, 1802-1900* [以下 *CIOIP* とする], t. 7, #2266, p. 207-231, surtout p. 221-222.

18 DF, t. 2, p. 215.

19 Ibid, p.217.

20 *BAMIP*, t. 16, no. 316, p. 684-695.

語詩作に精一杯取り組むのをそっと見守ろうではありませんか²¹。

こう述べた後、今後、右顧左眄することなく「古き良き勉強」の発展強化に尽力したいとスピーチを結んでいる。

以下に述べていく教員の履歴を詳しくみると、ジラルール校長の下に集まっていた教員の中には、どこかでジラルールとの接点があり、人物をじかに確かめられた人物が見つかる。例えば、ゴシェ（#1-3）²²はリセ・シャルルマーニュでジラルールが教えた人物である。レオンス・ペルソン（#47）も、ジラルールが高等師範学校で教えた時期に在籍していた。ピシヨ教頭やデュブレ（#1-4）は、前任校でジラルール校長の下で教えており、ジラルールのコンドルセ着任に符合するかのようにならぬまでもまたコンドルセに移ってきた。キュシュヴァル（#1-5）の兄は、ジラルールと高等師範学校の同期であった。現段階で、こうした教員の異動にジラルールがどの程度関与していたのか実証するには到っていないが、コンドルセの「校風」を作り上げる上でジラルールの果たした役割の大きさを感ぜずにはいられないのである。

教頭たち

教頭 *censeur* の職はピシヨ（#C-1）²³が1878年9月から務めていた。ピシヨはポリテクニク校出身で、1850年から数学の教師となり、非常に多くの教科書がある。1859年から1875年までルイ＝ル＝グラン校で教え、ヴェルサイユのリセ校長も務めた（1875-1878）。砲兵将校の経験もあり、1871年、軍功によってレジオン・ドヌール勲章を受けていた。

1887年からはアルフォンス・ルスロ（#C-2）²⁴が務めた。こちらは、復習教師から総生徒監 *surveillant général* に進み、1868年から各地のリセで教頭を務めてきた。1889年8月にコンドルセ校を去りロラン校校長と

21 *Annales de l'Association amicale des anciens élèves du lycée. Condorcet* [...] - Paris : Ollendorff, 1886, p. 258-259.

22 本稿で採り上げる教員は、末尾の付表1にデータをまとめた。本文中では整理番号（学年ごとに分けアグレガシヨンの取得年順に配列）で示す。

23 Ch, 1871.1.23. *Léonore* LH/2148/50. DF3p. 104#91.

24 Ch, 1892.1.5; Off, 1903.7.28. *Léonore* LH/2405/59（#3-4 AD (Paris), #15 RS (1903.9.23), #18 EC, #23 RS (1892.1.19)）。ロラン校の歴史をつづった著作が1つある。*L'Ancienne communauté Sainte-Barbe et le collège Rollin*. Paris : impr. d'E. Douste, 1900.

なっている。

プチ・リセが開設されると、こちらにも教頭が置かれる。1882年10月9日総生徒監ビソン Bisson がまずプチ・リセ教頭代理に任命されたあと、1883年10月正式にエドゥアール・コルス (#PC-1)²⁵が教頭に任命された。1年後1884年10月コルスが新設のリセ・ジャンソン＝ド＝サーイの初代校長となると、ルイ・エドモン・ギュス (#PC-2)²⁶が教頭職を継ぐ。1892年ギュスはプチ・リセ校長 directeur となっている。なお、ギュスには、ルーキアーノスの教科書版 (G53) がある。

第5年級の教師

リセ・コンドルセの第5年級担当教員は、プチ・リセの開校に伴い、1882/1883年度から7名態勢となっている。1881年から1887年の間、最年長と思われるティリオン (#5-1)²⁷を筆頭に、おそらく最年少のゲルゼール (#5-13) までのべ13名が検出される。ただし、組担当教授 professeur divisionnaire ゲルゼールは、1882年にパリ文科大学へと転出し、代わりにブルジヌ (#5-8) が組担当教授として加わっている (翌年正教授)。これらのうち、ティリオン、パスケ (#5-2)、ヴァテル (#5-7)、フィリップ (#5-10) を除く、以下の9名について伝記的情報が得られた。

1853年から1884年までコンドルセで教えたドゥブレ (#5-3)²⁸は、コンドルセ校で学んだ後は²⁹、高等師範に入れず復習教師の道を進むことになる (1847年11月27日授業代講資格自習監督、1850年10月25日文学士号取得、1851年10月31日専門教育科目の文学・歴史授業担当講師、1853年11月19日1級復習教師・第7年級教師)。ようやく1857年文法アグレガシオンに合格すると、1864年10月13日第6年級教授、1868年8月6日第5年級教授に昇進している。1884年9月25日、ジャンソン＝ド＝サーイ校第4年級に移りそこで1894年10月1日の引退まで勤務した。

25 Ch, 1885.12.29; Off, 1901.7.23. *Léonore* LH/1407/26. 1891年にはモンテーニュ校校長に転じ、1901年まで勤めている < Dupont-Ferrier, 1913, p. 195, 201 >。

26 Ch, 1894.7.30. *Léonore* LH/1249/75 (#6 EC, #10 RS (1894.8.31)).

27 伝記事項は不明だが、1885/1886年度に引退したと思われる。

28 Ch, 1901.1.23. *Léonore* LH/680/27 (#8 EC; #10 RS (1895.3.2), #11 RS).

29 *Centenaire*, p. 31.

ドゥブレーと同じ年のコンスタン・ボフィス（#5-4）³⁰の出自や初めの経歴はドゥブレーに似ている。1848年から1849年までラニオンの第8年級授業担当講師やプレストのリセの総生徒監を務める。その後履歴の空白があるが、1852年から1855年まではシャトルーのコレージュで哲学・歴史・レトリックを教えている。1855年から1860年まではポンティヴィー（ナポレオンヴィル）、ついでレンヌのリセで教えており、この間1857年文法アグレガシオンを取得した。1860年～1864年、クタンスのリセやラ・ロシュ＝シュル＝ヨン（ナポレオン＝ヴァンデー）で教えた後、1864年パリへ異動。サン＝ルイ校の第6年級を1869年まで教えた後、コンドルセ校に移っている。文学博士号を持ち、ラテン語文法書や仏文羅訳の問題集を刊行している。

パリ生まれのリュモー（#5-5）³¹の履歴に関する情報は *Léonore* の史料からは不明であるが、1882年から1883年の間に第6年級から第5年級の教授になったことが『公教育職員録』からわかる。

ヴァスティカル（#5-6）³²は、1852年1月13日にヴァランシエヌのコレージュの自習監督から出発して、1856年10月1日ブローニュ＝シュル＝メールの論理学級担当講師となり、1863年10月17日ル・アーヴルで第4年級教師となった後、文法アグレガシオンを1番で通過してドゥエーのリセの第5年級教授、1873年9月15日からはヴァランシエヌのコレージュ校長、1878年9月11日からはカオールのリセの校長、1881年8月12日からはロデーズのリセの校長を務め、1884年9月29日から1897年10月1日に退職するまで、コンドルセ校の第5年級教授を務めた。

ブルジーヌ（#5-8）³³は、レンヌで学び、1860年8月に文科バカロレア、翌年8月に理科バカロレアを取得、1864年にはパリで文学士号を取得している。1867年高等師範学校に入るまで地方のコレージュで教えている（オト＝ヴィエヌ県マニャック＝ラヴァル Magnac-Laval、オルヌ県セー Sées、その後南仏のトゥロン、カルパントラ）。高等師範では、フランス革命史家アルフォンス・オラールや哲学者リヨネル・ドリヤック、

30 Ch, 1884.7.13. *Léonore* LH/154/46 (#5 EC, #7 RS)

31 Ch, 1894.12.17. *Léonore* LH/2425/74 (#2-3 AD, #9 EC)

32 Ch, 1898.12.30. *Léonore* LH/2677/75 (#5 AD, #12 EC, #16 RS).

33 Ch, 1894.1.12. *Léonore* LH/329/71 (#2 AD, #4 EC, #8 Notice individuelle (destinée à l'Inspection générale), ministère de l'IP, #9 RS).

ヴィクトル・エグジェール（パリ文科大学でブルーストを教える）が同期となるほか、同じコンドルセ校に勤める 3 人ルイ・アンベール（#5-9）、エミール・ファゲ（#2-7）、ヴァスト（歴史学教授）も同期であった。高等師範学校を修了すると、折しもプロイセン＝フランス戦争の最中で、ブルジョアも志願兵として 1 年間兵役につく。1871 年 4 月教壇に復帰、ヴェルサイユやモンペリエのリセで教える。その間 1872 年の文法アグレガシオンに合格しているが、1872 年 10 月から 1 年間病氣療養のため休職している。1874 年再復帰し、パリ市のコレージュであるシャプタル校、ロラン校で教えたあと、1880 年 10 月 1 日コンドルセ校に着任し、1882 年 11 月 18 日から第 5 年級を、1892 年 12 月 18 日からは第 4 年級を教えていた。

アルベール・ラファルグ（#5-11）³⁴は、1864 年 10 月から 1869 年までは復習教師をベジエのコレージュ、プールク（ブル＝カン＝ブレス）のリセ、モンペリエのリセで務めている。1868 年文学士号取得、1869 年から 1871 年までは故郷ペルピニャンのコレージュで歴史・地理を教えた。1871 年エク＝サン＝プロヴァンスのコレージュの第 2 年級、1873 年にサンスのリセの第 5 年級に移る。この任地で 1874 年に文法アグレガシオン取得、1876 年にはトゥルーズのリセの第 5 年級に移った。1880 年にパリ大学区内へ異動し、ヴェルサイユのリセとシャルルマーニュ校を経て、1882 年にコンドルセ校第 6 年級に着任した。1883 年から 1909 年の引退までコンドルセ校の第 5 年級で教えている。ラファルグは、リセ初等科³⁵用のフランス語文法書を数点デュボン社から刊行している。

シャルル・リン（#5-12）³⁶は、祖父ジャック（1797.8.8 - 1855.9.12. ENS1816. ルイ＝ル＝グラン校長を経て、コレージュ・ド・フランス教授となった。DF3, p. 84#8）、父ルイ・ヴィレルム（1824.11.16 - 1875.11.7. ENS1844, AgGr1847）とつづく教師一族の 3 代目である。1870 年 8 月 5 日高等師範学校に入る前、1 年間だけロラン校の代用復習教師を務めている。高等師範在学中、6 か月志願兵として従軍しているので、修了は 1874 年 9 月 30 日になっている。1874 年文法アグレガシオン取得、ラヴァルの

34 Ch, 1909.1.12. *Léonore* LH/1431/48 (#10 EC; #11-12 RS).

35 リセでも小学校相当の年齢の児童を教育しており、コンドルセ校にも準備年級、第 8 年級、第 7 年級があった。

36 Ch, 1895.12.31; Off, 1913.12.31. *Léonore* LH/2334/7 (#13 EC, #17 RS).

リセで1年教えた後、パリに移り、1882年10月11日コンドルセ校に移る。さらに兼任でサン＝ドゥニにある賞勲局付属教育施設の教師を1890年9月29日から続けることになる。父ヴィレム編作文教科書の改訂のほか、フェリックス・デルトゥール（1822.9.8 - 1904.11.11. ENS1842, AgL1845）やルイ・アンベール（#5-9）と共編の問題集などがある。

アンリ・ゲルゼール（#5-13）³⁷は、高等師範修了後、ラ・フレッシュ陸軍幼年学校、ついでポワティエのリセを経て、1880～1882年の短期間コンドルセ校で第5年級を教えた。1884年博士号を取得する一方で、1882年からはパリ文科大学、1891年からは高等師範学校で教え、1925年にパリ大学文学部教授（ラテン語詩講座）となって1928年引退している。1923年には学士院碑文アカデミー会員にも選出された。中等教育の教科書版としては、『同時代史第1書・第2書』（L54）などタキトゥスのテキストを数種類刊行している。1889年にオトン・リマヌス³⁸とともに始めた「クール・リマヌス＝エ＝ゲルゼール」Cours Riemann et Goelzerの古典語講座シリーズも有名である（アルマン・コラン社）。

アンベール

プールの担任となったルイ・アンベール（#5-9）は、オト＝マルヌ県ヴァシー Wassy（1926年まで郡中心地。宗教戦争の発端となる土地としても有名）で生まれている³⁹。その教歴は、1865年10月1日サンスのリセの復習教師候補生 aspirant-répétiteur から始まっている。翌年パリのロラン校の自習監督 maître d'étude となったが、1867年ついに高等師範学校に合格した⁴⁰。修了後、再びサンスのリセに戻って、今度は第5年級教師となる（1870-1873.5）。年度途中でモンペリエのリセの第3年級を10月まで教えた後、1873/1874年度からは1年ずつトゥルーズ（第5年級）、リヨン（第6年級）で教えた。1875年パリ大学区内ヴァンヴのリセの第6年級に移る。1876年から4年程ロラン校の第6年級を教え、1880年コンドルセ校の第5年級にやってきたのである。1886年には、コンドルセ校

37 Ch, 1903.7.19; Off, 1924.2.28. *Léonore* 19800035/0202/26459 (#12 RS (1903), #21 EC)

38 Othon Riemann (1853.6.13 - 1891.8.16. ENS1870, AgL1874). ノルマル講師

39 Ch, 1904.1.26. *Léonore* LH/1325/41 (#8 EC; #14 RS)

40 同期については上記ブルジョアの記述を参照。

の第 4 年級を教えることになった。1904 年 1 月 28 日にコンドルセ校は創立 100 周年を祝ったが、その直前 1 月 26 日アンベールは、現役のままレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ章叙勲を通知されている。

アンベールの数多い著作物は、大別して、1) アレクシス・シャサン⁴¹の『新フランス語文法』の改訂および練習問題編纂（ガルニエ社）、2) ギリシア語作家の教科書版と既存訳の改訂あるいは自らの新訳、3) フランス語作家の教科書版に分かれる。

2) で教科書版の対象となった作家は、ソボクレーヌ『ピロクテテース』(G12)、アリストパネース抜粋（『プルーツ』から）(G20)、プラトーン『ソークラテースの弁明』(G24)、クセノポン（G29）(G32)、デーモステネース（G41）(G42）、アイリアーノス（G57）の 6 名である。

3) については、ラシーヌ『エステール』(F31)、『アタリー』(F32)、『イフィジェニー』(F36) とビュフォン撰文集（F51）がある。

興味深いことに、アンベールは、自分の編纂した『イフィジェニー』（ガルニエ、1882 年）を、生徒ブルーストに、「わが生徒マルセル・ブルーストに。親愛なる思い出として。」⁴²という献辞とともに贈呈している。1883 年 8 月 3 日のリセの褒賞授与式⁴³でのフランス語次席 5 等、仏語羅訳次席 4 等という成績は、アンベールの期待に応えようとした少年の精一杯の努力の結果だったのかもしれない⁴⁴。

第 4 年級の教師

文法課程（第 6 年級～第 4 年級）をしめくくる第 4 年級は、ブルースト

41 Alexis Chassang (1827.4.2 - 1888.3.8. ENS1846, AgL1849). 高等師範学校講師などを経て総視学官となる<IGIP>。

42 *Marcel Proust : [catalogue d'exposition]*.- Paris : Bibliothèque nationale, 1965, p. 11 (#51). この本は 2015 年 12 月競売に付された (cf. *Bulletin d'informations proustiennes*, 46 (2016), p. 188)。

43 祖母への書簡からマルセル少年の晴れがましさが伝わってくる (Kolb, t. 21, #391, p. 542-543)。ブルーストの書簡 (Kolb (Philip), ed.- *Correspondance de Marcel Proust*.- Paris : Plon, 1970-1993, 21 vol.) の参照は、Kolb として巻数、書簡番号、ページで示す。

44 Ferré, p.90 では thème grec となっているが、ギリシア語教育を第 4 年級からと定めた 1880 年カリと矛盾する。今の所コルブに従い、仏語羅訳 thème latin 次席 4 等としておく< Kolb, t. 1, p. 48 >。

にとって長期の欠席が増えた学年となった。

さて、1881年から1887年の間にコンドルセ校で第4年級を教えたのはのべ9名に及ぶ。ルグエ（#4-1）とブイヨン（#4-2）は、1862年の時点ですでにコンドルセで教えていた（校長ジラルル、レトリック級のゴシェ、キュシュヴァルと同様）。この間の異動をみると、マルボン（#4-3）の空席にボフィス（#5-4）が昇進して座り、さらに、ブイヨン引退とレオンス・ペルソン（#4-7）死去の穴を、第5級から昇進したルイ・アンベール（#5-9）とポティエ Potier が埋めている。このポティエについては詳細が不明である（付表1からは除外している）。また、アンベールは第4年級の授業をレシス Leissus なる人物に代講してもらっている⁴⁵。

パリ生まれのブイヨン（#4-2）については、伝記的な情報をわずかしき得られず⁴⁶、文法アグレガシオン取得（1850年）前のことは不明である。1年間トゥルーズのリセで教えた後、1851年から1853年まではアルジェのリセで教えている。そして1853年10月から1886年まで、コンドルセ校で教え続けた。引退して名誉教頭号を授与されている。ブイヨンの著作は、シャサンのギリシア語文法に合わせて作られた、ギリシア語作文の小さな教本（第5年級用）である。

マロット（#4-4）については、アグレガシオン前は、ペリグーのリセの第6年級担当講師を務めていたこと以外、ほとんど情報が得られていない。著作も見られない。

ボー（#4-5）についても、*Léonore* の史料のみが参照できた⁴⁷。バカロレア取得後は、高等師範の道に進めなかったため、各地のコレージュやリセで生徒監督や授業担当講師の仕事をしてながらアグレガシオンを準備した。1862年文法アグレガシオンに合格、ルイ＝ル＝グラン第5年級の代用教員を手始めに、パリに移り、1866年10月ヴァンヴ校で第6年級の正教授の職を得た。コンドルセ校には、1874年10月から第4年級の教授として着任し、受勲時までその職にあった。著作は確認できない。

レオンス・ペルソン（#4-7）は、サン＝ルイ校からコンドルセに移ったばかりだったが、1883年8月3日コンドルセのプチ・リセ褒賞授与式で

45 AgGr1864 の Joseph François Leissus とと思われる（付表1から除外）。

46 Ch. 1879.1.15. *Léonore* LH/313/88（#2 AD, #6 RS）. 通常含まれているはずの出生に関する戸籍抄本は *LÉONORE* には見当たらない。

47 Ch. 1888.12.31. *Léonore* LH/152/26（#2-3, EC; #7RS）。

スピーチを行なっている（この年度第 5 年級のプルーストも列席しただろう。1860～1880 年に記念像が作られた偉人達についてペルソンは話した⁴⁸）。ペルソンには、17 世紀の劇作家ジャン・ロトルーに関する文献学的な研究のほかに、ミシェル・ブレアル（1832.3.26 - 1915.11.25. ENS1852, AgL1856）とアナトール・バイイ（1833.12.16 - 1911.12.12. ENS1853, AgGr1857）の『単語の学習：意味と語源で分けられたラテン語単語』（アシェット、1882）を使った練習問題集（アシェット、1885）同じくギリシア語練習問題集（1886）や、ブレアルとの共著によるラテン語基礎文法（アシェット社、1888）がある⁴⁹。また、自らの父親で、アルビとシャルトルの師範学校校長も務めたジャン＝バティスト・エドゥアール・ペルソンの伝記は、19 世紀前半の初等教育史に貴重な史料となりうる業績であり、それだけにペルソンの早世が惜しまれる。

ルグエ

結局、プルーストが 1883/1884 年度第 4 年級で学ぶことになるのは、最年長のルグエ（#4-1）⁵⁰である。パリ生まれのルグエは、高等師範学校の出身者ではなく、1850 年文法アグレガシオンに 2 番で合格するまで、パリの寄宿学校の教師であった（ちなみに同時に合格したブイヨン、マルポンは、4 番と 10 番である。ブイヨンがパリで復習教師をしていたこと、マルポンがメッスのリセの第 6 年級の講師をしていたことも同じ資料からわかる）⁵¹。だが、ルグエは、若いころから教師として注目されていたよう

48 *Discours prononcé à la distribution des prix du Petit Lycée Condorcet, le 3 août 1883*- Versailles : impr. de Cerf et fils, 1883. これについて CGBN のつけた注による。

49 ブレアルとその教育観については以下を参照：立花史『マラルメの辞書学：『英単語』と人文学の再構築』法政大学出版局，2015, p. 44-51, 64-71. ちなみに、ブレアルは、プルーストの母方の祖母アデル・ベルンカステル（ナテ・ヴェイユ夫人）と遠い縁戚関係にあった（フィリップ・ミシェル＝ティリエ著，保莉瑞穂監修『事典プルースト博物館』筑摩書房，2002, p. [519] プルースト家系図）。

50 Ch, 1869.8.11. *Léonore LH/1559/15*. パリ・コミューヌの際の賞勲局火災で史料が失われ、その後の復元では叙勲の記録のみが残されている。Cf. Ferré, p. 97-99.

51 *Bulletin administratif de l'Instruction publique* [以下 BAIP とする], t. 1, p. 320.

である。実際、パリ大学区長代理を長く務めたアドルフ・ムリエ（1807.6.7 - 1890.8.22. ENS1827, AgPh1841 < Condette, p. 288-289 >）はヴィクトル・クザンからルグエの推薦を受けたことを記録している⁵²。ルグエは1852年からコンドルセで教えるが、1860年には生徒の家庭からも信頼が篤いと当時の校長フォルヌロン（在職1856-1865）が記している。しかし20年後彼の評価は揺らぎ始めた。元同僚であるジラルール校長は、周囲の評価の高さにもかかわらず、生徒の教育面で期待した効果が得られていないことに不満を漏らしている。1879年の視学官報告にも、生徒に対して甘すぎる事が記録されている。年齢の故だろうか。生徒プルーストに対する彼の評価も決して厳しいものではなく、プルーストの病欠を残念がっている様子が覗える⁵³。

ルグエの著作としては、最初期のものが、ダニエル・パレ Paret⁵⁴との共編で行われた数々の参考書編纂である。1842年から1853年にかけて、バカロレアの虎の巻となる参考書3タイトルが、ディド社から出版されている。同じパレとの仕事で、1848年から1849年にかけてアシェット社から刊行されたラテン語仏訳問題集（第8年級からレトリック級まで8巻）がある。この問題集の各巻は、1886年まで最低2~3回版を重ねた。

さらに同じコンビで、キケロー『老年について』の対訳本もアシェット社から出している。単独の仕事としても、このようなアシェット社の対訳本の編纂は行われ、キケローの『友情について』（1850）、トゥーキューデーデース『ペロポンネーソス戦史第1巻』（1866）がある。『友情について』対訳本は1850年から1893年まで少なくとも4版を重ね、さらに逐語訳をつけた版のほうも、1860年から1895年までの間に11版を重ねた。

1860年代に一旦刊行されるタイトルは減るが、1870年代に入ると、リサンスのギリシア語試験などに関連したものが発表されている（1874年には、ホメーロス讃歌集の『アポッローン讃歌』、ハリカルナッソスのディオニューシオス『アンマイオス宛第1書簡』、1876年には、アリスト

52 Mourier (Adolphe).- *Notes et souvenirs d'un universitaire, 1827-1889*.- Orléans : impr. Georges Jacob, 1889, p. 262.

53 ルグエによる評価には「3週間前から欠席」（2学期）、「5月から欠席 [...] 勉強は不十分」（3学期）とある< Ferré, p. 65 >。

54 コレージュ・ロラン教授、教頭を経て1864年第3代校長となるが急死 < Chauvin, p. 146; Dupont-Ferrier, 1913, p. 168 >。

テレーズ『レトリック』第 2 巻、ピンダロス『ピューティア祝勝歌』第 1～第 3、ソポクレース『アンティゴネー』（コロスの部分）。

さらに 1870 年代から 1880 年代にかけて、カリキュラム指定作家の教科書版（対訳は付かない）の刊行が始まる。フランス語では、フェヌロン『テレマックの冒険』（F42）と『死者たちの対話』（F41）⁵⁵、さらにラ・フォンテーヌ『寓話詩』（F12）（F13）。ラテン語では、カエサル『ガッリア戦記』（L40）、オウィディウス『変身物語撰文集』（L21）⁵⁶がある。さらにギリシア語でも、ホメーロスやトゥーキューディデースのものが出されている（G06）（G22）。最後に、古典詩の韻律法の著作（ドイツ語）の翻訳が、ルグエの名義でクリンシク社から刊行されていることも付け加えておこう。

ルグエは、1884 年の公教育高等評議会委員選挙でも、前任者のシャルル・ルベグに代わって文法アグレジェ代表として選出され、4 年の任期を全うしている⁵⁷。ところで、1884 年 5 月に行われたこの委員選挙に臨む教員たちの考えの一端が或る匿名記事からうかがえる。その記事に引用されたルグエの意見は、1880 年カリに対する強い拒否反応を表している：

[...] 広汎な意見として、これら [文法課程の諸学年] の成績は悲惨きわまりないものである。ギリシア語は学習されず、ラテン語は忘れられ、新カリキュラムで与えられた分け前をもっともよく享受したはずのフランス語さえ、以前にくらべてはるかに覚えられていない。子供たちの精神は、有益というより珍しいというだけの科学的な初歩知識の大群を詰め込まれ過ぎて疲れ果て、知性の発展や判断力の形成には役立っていない。我々の中等教育の目的を功利的で純粋に実用的な教育とすることではなく、知的水準

55 古典中等教育 1880 年カリではいったん外されたが、女子中等教育 1882 年カリでは第 1 学年に配当。古典中等教育 1885 年カリで復活した。

56 『変身物語』の抜粋箇所については、ルグエも序文で述べているとおり、すでに 1856 年 3 月 5 日のアレテ <BAIP, t.7, p. 43> と 1856 年 3 月 31 日の通達 <CIOIP, t. 5, #1427, p. 32> で、1856 年 3 月刊行のドララン社の版に準拠するよう定められている。

57 ルグエの得票は有権者の 57.82%、投票者の 63.06% だった <Jey (Martine).- *La Littérature au lycée : invention d'une discipline (1880-1925)*.- Metz : Université de Metz, [1998], p. 290>。

を向上させ、しっかりした堅固な学習によって、自由職業を目指す若者たちを準備することにあると考える者全員にとって、今や警鐘を鳴らすべき緊急時となったのである⁵⁸。

ルグエは、1884年10月30日に創設された中等教育カリキュラム改訂特別諮問委員会（第3部門：文学・文法部門）に加わり、1880年カリの改訂に参画した⁵⁹。

第3年級の教師

第3年級の担当教員はほぼ6人態勢で、1881～1889年間のべ11名が教えた。E. フジュール（#3-1）以外、1830年代生まれの中堅教員と1850年代生まれの若手教員に分かれている。若手の二人、リュシヤン・ブリュネル（#3-6）とモリス・アルベール（#3-7）は組担当教授で、このころ博士論文を書き上げたばかりであった。ブリュネルはプーストが第3年級に入る前に、コンドルセ校を去っている。1886/1887年度の第3年級は、フジュールの引退、アルベールの転任による空白をサロモン（#3-9）とモンソー（#3-10）が埋めている。1881年から1889年3月末までの間ずっと第3級で教えていたのは、ギユモ（#3-3）、リセール（#3-4）、E. ペルソン（#3-5）の3名であった。

最古参エドモン・フジュール（#3-1）は、1836年アンリ・カトル校の復習教師兼初等科教師として教歴を始めている。1839年文学アグレガシオン合格後、ポワティエ（1839-1844、第2年級、のちレトリック級）、ドゥエー（1844-1850、レトリック級）、リヨン（1850-1854、レトリック級）と異動し、1854年11月パリのコンドルセ校へ移って来た（第2年級の組担当教授）。1855年に『公教育総合誌』*Journal général de l'instruction publique*に掲載した「教室でのフランス語著作家の説明」« Explication des auteurs français dans les classes »は、フランス語テキストの「説

58 anonym., « Les cahiers de doléances de l'Université », *Le Correspondant*, nouv. sér., t. 99, 2e livraison (25 avr. 1884), p. 197. Cf. Mourier, *op.cit.*, p. 261-262.

59 この委員会の13名の構成は、コンドルセからジラール校長、タルボ、モンも参加、残りはアンリ・カトル4名、シャルルマーニュとロランとサン＝ルイからは各1名、大臣官房の1名、議長は総視学官E. マニユエル<BAMIP, t. 36, no. 623, p. 263-265>。

明」という、当時の教師に課せられた新たな難題に対して、授業で扱うのに適した分量や手法を提案するという点で画期的なものとされている。その後 1860 年から 1 年間シャルルマーニュ校第 3 年級で教えたが、1861 年以後はコンドルセ校で教え続けた（第 4 年級のち第 3 年級担当）⁶⁰。

モンジノ（#3-2）の履歴については、高等師範の出身であること以外ほとんど調べがつかなかった。一方、モンジノの著作については、ラテン語著作家のコルネーリウス・ネポースの教科書版（L25）とギリシア語著作家クセノポーンの教科書版が数点ある（G27）（G30）（G31）（G32）。

中堅教員リセール（#3-4）も高等師範出身ということ以外まだ調べがつかない。CGBN で著作も確認できない。

エミール・ペルソン（#3-5）⁶¹については *Léonore* の履歴情報は少なく、1864 年 9 月 29 日に教歴が始まり、35 年に及んだことが記されているに過ぎない。興味深いことにペルソンの妻マリー・アンリエット・ルイーズは、ルグエ（#4-1）の娘である。またルグエの子レナルド・ルイ・アンリ・ルグエ（1857.9.26-）は、ポリテクニクを出て鉄道や電気事業といったインフラ関係の実業家として活躍した人物で、レジョン・ドヌール勲章コマンドゥール章まで授与されている⁶²。ペルソンの受勲もこの義弟の働きかけがあったのかもしれない。E. ペルソンには学術上の著作があり、古代ローマ史に関する博士論文とジョアシャン・デュ・ベレーの著名なマニフェスト『フランス語の擁護と顕彰』の学術的な版（セール社、1878 年）がある。さらに、モリエール『女学者』（F15）、ボシュエ『世界史序説第 3 部』（F22）、ラシーヌ『ブリタニキウス』（F35）⁶³などのフランス語著作家の教科書版のほか、タキトゥスの教科書版が注目される⁶⁴。

60 Ch, 1877.10.3. *Léonore* LH/ 966/ 35 (#2 EC; #3 RS); Chervel (André) - *Histoire de l'enseignement du français du XVIIIe au XXe siècle*. Paris : Retz, 2008. (Les Usuels Retz), p. 525-527. ちなみにその実兄レオン・フジュール（1810.2.2 - 1858.1.12. AgL 1829. コンドルセ校教頭 1854.9-1858.1）の編纂した撰文集（ドララン社）は、19 世紀後半のリセでもっとも普及した教科書の一つであった< Chervel, Ibid, p. 547 >。

61 Ch, 1901.7.23. *Léonore* LH/ 2117/ 8 (#3 AD (Saint-Cloud), #8 RS (très succinct), #11 EC)

62 Ch, 1895.1.4; Off, 1912.11.11; ComLH, 1923.1.31. *Léonore* 19800035/0269/36019.

63 『ブリタニキウス』のペルソン版は CGBN で確認できないが、他の大学図書館で所蔵が確認できる。

『ゲルマーニア』（1879）、『同時代史』（L53）、『年代記』（L49）、さらに、ティベリウス帝の治世を扱った『年代記（第1、第2、第3書）』（L50）とネロー帝の治世を扱った『年代記（第13、第14、第15書）』（L51）と続いた。

リュシヤン・ブリュネル（#3-6）⁶⁵は、1880年10月パリのリセに移るまで、サン＝カンタン、ナント、ナンシーでレトリック級を教えている。1880～1885年コンドルセ校で教えた後、ロラン校、サン＝ルイ校を経て最後はアンリ・カトル校で教えた。ブリュネルは、18世紀文学を専門とし、彼が編纂したヴォルテール書簡撰（F47）と散文撰（F49）、J.-J. ルソー撰（F50）などの教科書版は、版を重ねた。

一方、モリス・アルベール（#3-7）⁶⁶は、のちに高等師範学校ラテン語講師も務めるポール・アルベール（1827.12.14-1880.6.21. ENS1848, AgL1851. 当時はペリグーのリセのレトリック級教授）の息子で、アングレームで生まれている。高等師範修了後はローマ・フランス学院に留学した。その博士論文に見られるように古代ローマ世界に当初関心をもっており、1886年には、ホラーティウスの「詩学」とされるピーソー宛書簡詩の教科書版を刊行している（L20）。しかし、その後のアルベールの関心は、フランス文学、とくに喜劇とその舞台に移っていくようで、この方面での業績を多く残すことになる。1887年にコラン社から出したモリエール演劇選集は、古典中等教育の枠にとらわれず、専門中等教育や女子中等教育などのカリキュラムも意識した構成になっている。サン＝シールの陸軍士官学校の文学担当教官となった（1882-1897）。

後にコレージュ・ド・フランス教授となるポール・モンソー（#3-8）⁶⁷は、ヨンヌ県オセール生まれで、父エティエンヌ・オギュスタンもオセールのコレージュのレトリック級教師であった。ポールは、高等師範修了後、アテネ・フランス学院に留学。1883年ヌヴェールのリセを皮切りに中等教育の教員として約20年を過ごしている。コンドルセ校で教えたのは1885年9月から1888年12月までで、その後、アンリ・カトル校、

64 ラテン語著作家のなかで、タキトゥスについてブルーストの関心がみられる。

65 Ch, 1903.7.28. *Léonore* LH/382/42（#12 RS）.

66 Ch, 1897.12.28. *Léonore* LH/15/35（#9 EC, #12 RS）.

67 Ch, 1903.4.5; Off, 1931.8.11. *Léonore* 19800035/0253/33734（#5 EC, #6 RS）. Cf. Charle-Telkès#68.

ビュフォン校、サン＝ルイ校を経て、1890 年 4 月から 1907 年までアンリ・カトルで教えた。その後は、コレージュ・ド・フランス教授となり、1912 年 12 月碑文アカデミー会員に選ばれた⁶⁸。ラテン文学とくに初期キリスト教から教父時代のラテン文学を専門とした。1902 年までの時点で見て、専門書や学術専門誌への投稿論文の抜き刷りとみられるものが多数ある。これに反して、レトリック級教授の活動と関連する仕事はきわめて少なく、ラシーヌに関する啓蒙的な著作とキケローのさまざまな作品をフランス語訳の抜粋で紹介する著作が刊行されているだけである。

シャルル・サロモン (#3-9)⁶⁹の父モリス (1825.4.2-1892.7. ENS1845, AgL1849. Ch, 1880.2.9 *Léonore* LH/2450/41. cf. DF3, p. 172#508) は当時メッスのリセ教授。シャルルは、高等師範学校修了後、ローマ・フランス学院で学んだ後 (1881-1882)、ランスのリセで教える (1882-1885)。その後パリに移り、ロラン校を経て、1887 年から 1893 年、さらに 1896 年から受勲時までコンドルセ校で教える。第 3 年級 (1887-1889)、第 2 年級 (1889-1893)、レトリック級 (1896-1908)、1908 年からは高等第 1 年級を教えた。1893 年から 1896 年の間は、ラカナル校とルイ＝ル＝グラン校で教えている。著書はほとんど残していないようである。

教員として異色の経歴を歩んだのが、短期間のみコンドルセに関わったデルプーシュ (#3-11)⁷⁰である。シャトルーとブル＝カン＝ブレスのリセのレトリック級教授を務めたあと、1884 年ラ・フレーシュ陸軍幼年学校教官となる。1885 年には下院議長の官房に入る。1886 年再び教職に戻って、カンのリセ教授となるが、すぐにパリに呼ばれて、シャルルマニュ校、ついでコンドルセ校と転任を繰り返す。1887 年 6 月 2 日、親戚であった大臣スピュレール Spuller の求めに応じて公教育省の大臣官房長となった (コンドルセ校の講義は代講に委ねられている)。スピュレールが外務大臣になると、外務省大臣官房長となっている (1889-1890)。さらに生地のコレーズ県から下院代議士に選出 (1890-1898)、メリーヌ内閣の郵政電信担当副大臣の地位にもついた (1896-1898)。その後財務省収税徴

68 このときモンソーに敗れた美術史家エミール・マールに対してブルーストは慰めの手紙を書いている (Kolb, t. 17, #236)。

69 Ch, 1914.1.16 *Léonore* LH/2450/16 (#3 AD, #5 EC, #7 RS)。

70 Ch, 1887.12.31; Off, 1919.7.12. *Léonore* 19800035/ 0268/ 35801 (#13 RS (1888.2.11), #14 EC, #23-24 Motifs de la présentation, #25 RS (1919))。

集官を務めたが（1898-1910）、1910年代以後、民主共和党 Parti républicain démocratique 中央執行委員会委員として政治活動に励んだ⁷¹。教育内容と関わるような著作はやはり見当たらない。機会に応じた演説や下院での種々の委員会報告が数点見られるだけである。

ところでデルプーシュはコンドルセ在任期間中このように政官界で活躍したため、実際には代講が行なわれたようである。1889年版『公教育職員録』には、ピカールの名があがっているが、これは、ノルマルとアグレガシオンでデルプーシュの同期であったリュシヤン・ピカール（#3-10）と考えられる。ピカールには、ビュフォンの教科書版（F51）が1点記録されているだけである。

ギユモ

プルーストの教師となるギユモ（#3-3）⁷²に戻ろう（AgGr1847のギユモと区別しよう）。パリ生まれのギユモは、ルイ＝ル＝グラン校で学び、コンクール・ジュネラルではギリシア語で1等賞を獲得している。高等師範修了後、コルシカ島バステリアのリセに配属（第6年級担当講師）、1年後サンスのリセに移るが体を壊し休職。1856年マルセイユのリセに移った後、1859年の文法アグレガシオンに1番で合格（モンジノは4番で合格）、1861年5月ヴァンヴ校の第6年級組担当教授となる。同年10月コンドルセ校第6年級に着任。1862年には文学アグレガシオンにも4番で合格し、同校第4年級を経て（1864-1878）、1894年の引退まで第3年級を担当した。フェレの引用する視学官報告などはいずれも厳しい評価をギユモに下しているが、グレニエは、この目立つことのなかった教師について、追悼記事の中でこう語っている：

71 フランス国民議会公式サイト *Base de données des députés français depuis 1789* も参照：

http://www2.assemblee-nationale.fr/sycomore/fiche/%28num_dept%29/2341
(2018.3.23 閲覧)

72 Ch, 1897.12.31. *Léonore* LH/1238/40; *AssENS*, 1906, p. 45-49 (1学年上のレオンス・グレニエの執筆); cf. Ferré, p. 112-113. 末弟ジュール・ギユモ(1835.4.16-1923.11.24)は、セーヌ県庁で局長級まで勤め上げる一方で劇作家・劇評家としても活躍した<*AssENS*, 1906, p. 45; *Léonore* LH/1238/52>。

文法教育を終えてもう子供ではない生徒たちに対し、[ギユモ] はよく話すことだけでなくよく考えることをも教えた。傑作の学習から、趣味を形作る適正な印象とともに、心情に働きかけ、子供の中に人間性を刻印し、かつて文学の学年が人文学級と呼ばれていたように人間性という美しい言葉を正当化するような道徳教育をも取り出したのである⁷³。

ギユモのほとんど唯一の著作は、デーメートリオス『文体論』の仏訳である（1879年に *Revue de l'Instruction publique* に掲載）。

第 2 年級の教師

1885 年 10 月プルーストは第 2 年級に進学したが、病気が重くほとんど通学できなかった。そのため、次年度（1886/1887）も第 2 年級にとどまった。プルーストは、2 回ともクルボー（#2-3）の組に入った。

この学年では、1881 年から 1889 年の間、のべ 9 名が教えている。その異動は次のようにまとめられる。

1882/1883 ロベール（#2-5）が転出、ドフィネ（#2-6）が入る

1884/1885 ドフィネ、他校へ転出、4 人態勢

1885/1886 ファゲ（#2-7）が入る、5 人態勢

1887/1888 ファゲが去り、4 人態勢

1888/1889 キノ（#2-1）引退、モソ（#2-2）がレトリック級に上がる。第 3 年級からサロモン（#3-9）が昇進、ランティヤック（#2-8）が新たに入る

1889/1890 ランティヤック去る、新たに 2 名入り、5 人態勢

アルフレド・キノ（#2-1）⁷⁴は、1848 年高等師範に入り、テーヌ、サルセーらと同期になる。後に劇評家として活躍するサルセーとは交友が続いた。第 2 帝政成立とフォルトゥール改革のために最も影響を受けた世代になる。高等師範修了後、キノはアルジェのリセの教師となっている（1851.10.4-1862.10.23）。その間 1854 年にアグレガシオンを取得している（年齢要件と教職要件を満たす）。その後 1 年間、ノール県ドゥエーのリセ

73 *AssENS*, 1906, p. 47.

74 Ch, 1882.7.13. *Léonore* LH/2250/40（#2 RS, #4 EC）. CGBN に著作は記録されていない。

で教えたのち、パリのサン＝ルイ校に移る。ここも1年で終えて、1864年9月9日からコンドルセ校で教えている。

コレ（#2-4）については *Léonore* に史料が無いため、履歴について語るができない⁷⁵。また著作も確認できない。この人物についてブルーストは知人から尋ねられたことがある。ブルーストの友人であった劇作家ガストン・アルマン・ド・カイヤヴェ（1869.3.13 - 1915.1.14）が教わったらしい⁷⁶。

レオン・ロベール（#2-5）⁷⁷も、政界と関わりの強かった教師である。サンスで学んだ後、パリのルイ＝ル＝グラン校とサント＝バルブ寄宿学校に移り、コンクール・ジェネラルでラテン語ディセルタシヨンの1等賞を取った。高等師範学校で3年学んだ後、ニオールのリセでレトリック級を教える。1869年文学アグレガシヨンを取得すると、トゥルーズのリセのレトリック級教授となる。1876年パリに移り、コレージュ・スタニスラス、リセ・シャルルマーニュを経て、コンドルセ校に転じ、1882年まで第2年級で教えている。その後アンリ・カトル校へ転じ、レトリック級教授となった。この間、1884年5月の公教育高等評議会の文学アグレジェ代表委員選挙に出馬し当選、1887年6月1日パリ大学区視学官任命まで務めた⁷⁸。一方、公教育省大臣官房長（1885.4.6-1886.12.11 ゴブレ大臣の下）も務め、ゴブレが首相になると（1886.12）首相官房長 *directeur du cabinet du Président du conseil* となる。この時、レオン・ロベールは自らの父にレジオン・ドヌール勲章を叙勲させている⁷⁹。レオンはその後、

75 *AnnENS*, 1897 に追悼記事が掲載されているが未見。

76 1922年4月10日（推定）の旧姓ジャンヌ・プーケ（当時はモリス・プーケ夫人）からブルースト宛の手紙 < Kolb, t. 21, #76, p. 122 > .

77 Ch, 1885.7.11; Off, 1888.12.30. *Léonore* LH/2350/26（#12 [ES]（1885.8.26）, #13 EC）. cf. IGIP p. 588-589.

78 ロベールの得票は有権者の57.94%、投票者の66.47%だった。改革に対してロベールは穏健な推進派に属した < Jey, *op. cit.*, p. 290-291 > .

79 Ch, 1886.12.30. *Léonore* LH/2348/36（#5 Lettre de Léon Robert au grand chancelier de la LH（1887.3.3）, #7 EC, #8 RS）父デジレ・ルイ（1812.9.3-1891.4.13 パ＝ド＝カレー県バポーム Bapaume 生まれ、デジレの父フランソワ・マリーはバポーム在住の憲兵）は、レオンが生まれた当時、サンスで車大工 *charron* を営んでいたが、1869年からサンス市議員を、1870年12月からはサンス市第1助役を勤めていた。

1890 年 3 月 25 日総視学官に任命され、中等教育の文科を担当するが、5 年後に現職のまま死去した。教育関係の著作としては、コルネユ (F07) と小ブリーニウス (L24) の教科書版があるほか、初級の読本と作文の教科書 (レジス・ジャリフィエとの共著) がある。

ウジェーヌ・ランティヤック (#2-8)⁸⁰は、オリヤックのコレージュで学ぶ。1875 年 1 月 18 日からサン＝ルイ校で復習教師の職についたが、1877 年 10 月休職し、アグレガシヨンの準備をする。1881 年文学アグレガシオンに合格、ペリゲー、ポワティエ、ル・アーヴルのリセでつぎつぎと教えている。1887 年ヴェルサイユのリセで理科志望生徒への文学授業を担当、同年文学博士号も取得している。コンドルセ校には、1888 年 8 月 4 日第 3 年級教授としてやってくるが、同年 12 月 19 日には第 2 年級へ出講した。1889 年 8 月 22 日にはミシュレ校へと早くも転任、その後も、ルイ＝ル＝グラン校 (第 2 年級 1891-1893)、サン＝ルイ校、ジャンソン＝ド＝サーイ校とめまぐるしく転任を繰り返している。1894 年 7 月の受勲時は、サン＝ルイ校のレトリック級教授だった。1898 年 11 月公教育相大臣となったジョルジュ・レーグの招きで官房次長の職にもついたことが転機となった。1903 年には、教壇に戻ることなく、カンタル県議会議員となったほか、1903 年 1 月上院選挙に急進共和派から出馬して当選、以後死去時まで上院議員の座を守った⁸¹。ランティヤックは、フランス演劇史の研究で業績を残しており、ポーマルシェの研究は現在でも参照されている。教育関係の業績としては、多くの文学史の執筆がある。

ところで、1904 年 9 月 24 日と推定される母への手紙の中で、プルストは、『ル・タン』紙 (1904 年 9 月 22 日号 2 面) でランティヤックの真率な告白を読んだことを伝えている⁸²。これは、著名人に対して読書について行われた一連のインタビュー記事である。その中で若い時から勉学や教育のために必要な本を義務的に大量に読んで来たため、読書の喜びをほとんど知らなかったとランティヤックは記者に語っている。

80 Ch, 1894.7.30. *Léonore* LH/1643/68 (#3 AD, #7 EC, #9 Titres littéraires). ほとんどの履歴情報は以下から <DF3, p. 167#467>.

81 上院議員としての活動についてはフランス元老院公式サイトを参照：
http://www.senat.fr/senateur-3eme-republique/lintilhac_eugene0361r3.html
(2018.3.23 閲覧)

82 Kolb, t. 4, #152, p. 296.

ドフィネ

オスヴァルド・ドフィネ（#2-6）⁸³が生まれたとき、父アントワヌ・ボネはアンバールのコレッジ校長であった。オスヴァルドは高等師範学校修了後、ムランのリセの第3年級授業担当講師となり、1871年アグレガシオン合格後、アヴィニョン、ニーム、モンペリエ各リセのレトリック級教授を務めている。1881年11月17日からその年度の終りまで、モンペリエ文科大学でラテン語・文学のコンフェランスも担当した。1882年パリに移る。コンドルセ校で第2年級を2年間教えた後、ヴァンヴ校のレトリック級教師を4年経て、1888年8月4日再びコンドルセ校レトリック級教授となった（ゴシェの後任）。CGBNに記録された著作は、褒賞授与式の演説2点と雑誌記事1点（聖フランソワ・ド・サルについて）のみである。

モソ

リセ卒業後のことだが、プルーストは、パリ文科大学に登録して学士号取得を目指していた時、モソ（#2-2）に個人教授を受けたことが知られている（モソはそのときコンドルセのレトリック級で教えていた）。

モソ⁸⁴は、1854年パリに出てルイ＝ル＝グラン校から高等師範学校へ入った。1859年に高等師範を修了すると、エヴルーのリセに赴任している。1860年文学アグレガシオンに合格し、パール＝ル＝デュックのリセのレトリック級教授となる。1863年リールのリセに転じ、1869年9か月間パリのルイ＝ル＝グランで第2年級の代用教員を務めた。その後5か月間の休職期間（ポスト削減に伴う休職で有給）をはさんで1870年からコンドルセ校で教え始める。第3年級から始まり、1878年から1888年まで第2年級を教え、1888年からレトリック級を教えている。

ファゲ

ところで、プルーストが第2年級に在籍していたとき、コンドルセの第2年級の別な組で、エミール・ファゲ（#2-7）が教えていたことは注目される。文芸評論家としても活躍し、プルーストにもよく知られており、格

83 Ch, 1899.1.20. *Léonore* 19800035/0126/15953（#7 RS, #10 EC）.

84 Ch, 1892.7.19. *Léonore* LH/1945/64（#2 RS; #3 AD; #7 EC）. DF3, p. 167#463. CGBNに著作は記録されていない。

好の文体模写の対象となった。1890 年 6 月 8 日と推定される日曜日の手紙のなかで、プーストの母ジャンヌは、『フィガロ』紙に発表されたファゲの記事についてマルセルに向かって酷評している（「父さんに昨日の『フィガロ』紙の聞いたこともないような凡作を読んだばかりです。ファゲのですよ。一体どこに彼の才能が隠されているのかわかりません、でも決して私たちは出会ったことはありません。」）⁸⁵。マルセルのほうも、1893 年と推定されている 12 月 18 日月曜日朝の手紙で友人に対して、モソの個人レッスンがあるので、ファゲの講演をいっしょには聞けないだろうと断っている⁸⁶。

ところでファゲの履歴を振り返っておこう。ヴァンデー県ラ・ロシュ＝シュル＝ヨン（ナポレオン＝ヴァンデー）に生まれている⁸⁷。父はポワティエのリセ教授ヴィクトル・ファゲ（1812.3.3-1881.10.28. AgL1844）である。ポワティエのリセで学んだ後、パリのシャルルマーニュ校に移った。1867 年高等師範学校に合格したが、1868 年に放校となっている。その後 1874 年に文学アグレガシオンに合格するまでは、ラ・ロシュ＝ブルジュのリセの授業担当講師、ポワティエのリセの父の許でその代用講師として教えていた。アグレガシオン合格と 2 年間の休暇を経て、1876 年ムランのリセのレトリック級教授となる。4 年後、クレルモン＝フェラン、さらに 1 年後ボルドーのリセに移った。2 年後パリにやってくる。シャルルマーニュ校で教えたのち、新設校リセ・ジャンソン＝ド＝サーイに迎えらる。その後、コンドルセ校の第 2 年級の組を兼任することになった。1884 年に博士論文（『16 世紀におけるフランス悲劇』）を提出したファゲは、1890 年からパリ文科大学でも教えた（1897 年からフランス語詩講座の正教授、1913 年引退）。

ファゲは生涯で極めて多数の著作を遺している。その中で、1886 年には中等教育に関連した著作がル・セヌ・エ・ウダン社から出ている。セヴィニエ夫人の書簡撰（F21）とボワロー、ラシーヌ、ラ・ブリュイエールの作品からなる『17 世紀の諷刺と肖像』である（どちらも 1891 年まで重版が確認できる）。後者の編著は、著作家の組み合わせと内容とそのまま

85 Kolb, t. 1, #24, p. 143-143.

86 Ibid, #147, p. 265.

87 Ch, 1892.1.5; Off, 1912.7.23. *Léonore* LH/925/15 (#5 RS (1912.8.2), #16-17 EC, #19 (1892.3.8))

ま一致する古典中等教育カリキュラム上の指定はない（F28, F38-39）。しかし、専門中等教育では、1886年カリ第1学年にボワロー『諷刺詩』が、第6学年にラ・ブリュイエール（編の指定あり）が配当され、女子中等教育1882年カリでは、前者が第2学年に、後者が第4学年に配当されているので、ファゲ編の著作も中等教育全般での使用を期待したものと考えられる。

クルボー

クロード・クルボー（#2-3）⁸⁸は、ジュラ県ヴィトゥルー Vitreux で生まれている。この小コミュニティ⁸⁹はジュラ県の東端、ドゥー県とオート＝ソーヌ県に接する辺りに位置し、東に30キロほど離れたブザンソンへと続く街道沿いに家はあった。父ロラン Laurent（30歳）と母ルイズ・ジョゼフィーヌ・パリ Paris（24歳）は馬具製造・販売業者 *bourellier* であった。両親の家計は、クルボーに捧げられた追悼記事（執筆はキュシュヴァール）⁹⁰からすると、とてもクロードに中等教育を許すような状況ではなかったことがわかる。それでも、クロードは、村の司祭にラテン語を教わり、その熱意と才能に感心した司祭の勧めでオート＝ソーヌ県マルネー Marnay の小神学校に入った。小神学校でも優秀な成績を収めたクロードは、学校当局からも進められた大神学校への進学を断り故郷にいったん戻る。自分の進路を教職に見据えるとブザンソンでの勉学を決意し、ぎりぎりに切り詰めた下宿生活を送りながら、ブザンソンのリセで哲学級を終えてバカロレアに合格すると、ブザンソン文科大学に通った。そこで古典学教授アンリ・ヴェイユ（1818.8 - 1909.11.5. non Ag, non ENS）の目に止まり、ヴェイユの添削や指導を受けて高等師範学校の受験に備え、ついに1853年合格を果たした。

こうした青年期の刻苦精励ぶりを見ると、教師クルボーの性格に対する次のような評価にも一理あると思わせる。総視学官ウジェヌ・マニユエル（1823.7.13 - 1901.6.1. ENS1843, AgL1847. 当時は詩人としても知られて

88 Ch, 1886.12.29. *Léonore* LH/609/65（#6 EC; #7 RS）.

89 当時の人口は400人に届くか届かないくらいであった。s.v. Vitreux 「フランス語版ウィキペディア」<https://fr.wikipedia.org/wiki/Vitreux>（2018-03-20 閲覧）.

90 *AssENS*, 1900, p. 70-75.

おり撰文集にも採用されることもあった) は 1886 年 2 月の報告で「クルポーは一本気な教師で、趣味の欠陥を矯正したり若者にありがちな空想をすっぱりやめさせたりするのは向いているが、才能を目ざめさせたり天賦の才を刺激したりするのはそれほどでもない。」と記している⁹¹。

パリに来るまでは、マコン、リヨン、アングレームで教えた。その後体調を崩したため、一旦、高等師範の生徒監督を務めることになった(1862-1864)。その後ヴェルサイユのリセで 1 年教えた後、パリのコンドルセ校へと移り、1865 年から 1894 年までこのリセで教えることになる。ルイ＝ル＝グラン校の校長ディディエ (1810.1.25 - 1868.5.25. AgGr1832) の娘と結婚し、高名なギリシア文学者アルフレード・クロワゼ (1845.1.5 - 1923.6.14. ENS1864, AgL1867) と義兄弟の間柄になっている。

上記の視学官報告にもあるとおり、教師としての評価は決して最上級のものではなかった。しかし、クルポーの古典文学への傾倒と教育への情熱は、追悼記事の記述からもよくうかがえる。

古典文学を熱愛していた彼 [クルポー] は、自分の生徒たちに古典愛好を吹き込んだ。的確な注解によって、読書量のおかげで容易くできた比較によって、ラテン語ギリシア語の深い知識によって、生徒たちに関心を持たせたのである。ある年、教室でエウリーピデースの『[アウリスの] イーピゲネイア』を訳読していたとき、このギリシアの作家に対する激しい熱狂を聴いている生徒の間に巻き起こしたので、ある生徒が、ひとりでアガメムノーンの娘 [イーピゲネイア] の台詞を暗記してしまい、驚き魅了されたクルポーに提案して、級友の前で台詞全部を暗誦してみせたほどである。それゆえコンクール・ジェネラルにおいて教え子たちにより勝ち取られた成功の多くの回数と持続は、クルポーの教育の確かさと多様さを証明したのである⁹²。

91 Ferré, p. 130-131 (他にも 1887 年のジラル校長の報告; 1887 年の視学官報告を引く)。

92 AssENS, 1900, p. 72-73. 『アウリスのイーピゲネイア』は第 2 年級の定番の作品 (G17) で、1880 年カリではフランス語のほうにもラシーヌの『イフィジェニー』が配当され両者を並行して学べるような配慮がなされている。

リセ・コンドルセの教師たち（前編）

1887年のコンクール・ジェネラルにプルーストは出場している。7月13日には歴史の科目を受ける第2年級の生徒12人に選ばれただけでなく⁹³、7月22日のギリシア語仏訳の科目でも、欠席した生徒の補欠として出場している。賞や次席には届かなかったものの⁹⁴、クルボーから古典語への情熱を吹き込まれたのかもしれない。

[以下、次号へ続く]

93 Ferré, p. 151, 153-154.

94 Ferré, p. 154.

付表 1 : コンドルセ校教員、校長 (P)・教頭 (本校は C、プチ・リゼは PC)、教員 (第 5 年級～第 2 年級担当 1881-1887/1889)
 ENS : 高等師範学校 (数字は合格年)、AG : アグレガシオン取得年 (無印は文法アグレガシオン、AGL : 文学アグレガシオン)、
 LH : レジヨン・ドヌール勲章 (Ch : シュヴァリエ工章 : Off : オフィシエ工章) 県名は現行のもの、生地のコミュエヌの格については
 次号参照。

年	姓、名	生年月日	没年月日	生地	県	県番号	格	父の職	ENS	Ag	LH
P	Girard, Julien Nicolas	1820.6.1	1898.3.4	La Pointe-à-Pitre	Guadeloupe	971	2	ex-négociant	1840	AGL1843	Off
C 1	Pichot, Jean Joseph Louis Jules	1820.9.12	1906.9.14	Poitiers	Vienne	86	1	garde du génie	non	non	Ch
C 2	Rousselot, Louis Alphonse	1837.12.16	1909.3.8	Colmar	Haut-Rhin	68	1	maître d'études à l'école normale	non	non	Off
PC 1	Kortz, Édouard	1835.10.13		Lièpvre	Haut-Rhin	68	4	boulangier	non	1865	Off
PC 2	Gusse, Louis Edmond	1841.4.25	1896.4	Metz	Moselle	57	1	tourneur	1863	1866	Ch
5 1	Thirion, Hubert	xxx	xxx	xxx				xxx	1845	1848	non
5 2	Pasquet	xxx	xxx	xxx				xxx	non	1850	non
5 3	Debray, Louis Joseph Hector	1827.9.21	1902.1.14	Longueval	Somme	80	4	cultivateur	non	1857	Ch
5 4	Beaufils, Pierre Constant	1827.1.16	1903.4.1	Saint-Armel	Ille-et-Vilaine	35	4	cultivateur	non	1858	Ch
5 5	Rumeau, Joseph Pierre	1823.6.30	1902.5.19	Paris		75	1	marchand fruitier	non	1858	Ch
5 6	Vasticaer, Adolphe Pierre	1831.1.18	1906.2.26	Cambrai	Nord	59	2	praticien	non	1864	Ch
5 7	Watel, Denis	xxx	xxx	xxx				xxx	non	1871	non

リセ・コンドルセの教師たち（前編）

5	8	Bourgine, Ludovic Marie Joseph	1843.10.2	1917.12.31	Nantes	Loire-Atlantique	44	1	clerc de notaire	1867	1872	Ch
5	9	Humbert, Jean Baptiste Louis	1845.11.14	1921.12.31	Wassy	Haute-Marne	52	2*	professeur de collège	1867	1872	Ch
5	10	Philip, Cyr	xxx	xxx	xxx				xxx	non	1872	non
5	11	Lafargue, Albert Auguste Jean	1847.9.10	xxx	Perpignan	Pyrénées-Orientales	66	1	employé à la préfecture	non	1874	Ch
5	12	Rinn, Charles Wilhelm	1849.9.7	1929.5	Marseille	Bouches-du-Rhône	13	1	professeur de lycée	1870	1874	Off
5	13	Goelzer, Henri Jules Ernest	1853.9.23	1929.8.1	Beaumont-le-Roger	Eure	27	3	ingénieur de chemins de fer (fils d'un propriétaire)	1874	1877	Off
4	1	Legouéz, Michel Antoine Alphonse	1819.6.20	1892.7.31	Paris		75	1	xxx	non	1850	Ch
4	2	Bouillon, Jean Adolphe	1820.2.2	1903.6.8	Paris		75	1	xxx	non	1850	Ch
4	3	Marpon, Adolphe	xxx	xxx	xxx				xxx	1842	1850	non
4	4	Marotte, Alfred Auguste	1832.12.7	xxx	xxx				xxx	1853	1857	non
4	5	Beau, Edme Pierre	1831.4.19	1900.10.28	Châtillon-sur-Seine	Côte-d'Or	21	2*	serrurier	non	1862	Ch
4	6	Deleau, Auguste Stanislas Hubert	xxx	xxx	xxx				xxx	1860	1863	non

4	4	Person, Léonce Paul	xxx	1887	Albi	Tarn	81	1	directeur d'école normale des instituteurs	1863	1866	non
3	1	Feugère, Edmond Auguste	1817.9.7	1888.6	Gray	Haute-Saône	70	2*	receveur de l'enregistrement	non	AgL1839	Ch
3	2	Monginot, Louis Émile Alfred	1836.11.19	xxx	Paris		75	1	xxx	1856	1859, AgL1860	non
3	3	Guillemot, Charles Jean Adolphe	1830.6.17	1904.12.8	Paris		75	1	xxx	1851	1859, AgL1862	Ch
3	4	Risser, Samuel	xxx	xxx	xxx				xxx	1861	AgL1864	non
3	5	Person, Maximilien Émile	1839.1.24	1927.4.9	Châlons	Marne	51	1	jardinier	non	AgL1871	Ch
3	6	Brunel, Lucien	1853.3.26	1923.5	Paris		75	1	artiste peintre	1872	AgL1875	Ch
3	7	Albert, Marie Antoine Maurice	1854.1.17	1907.10.13	Angoulême	Charente	16	1	professeur de lycée	1874	AgL1877	Ch
3	8	Monceaux, Étienne Paul Victor	1859.5.29	1941.2.7	Auxerre	Yonne	89	1	professeur de collège	1878	AgL1881	Off
3	9	Salomon, Charles Jacob	1859.9.3	1925.11.16	Metz	Moselle	57	1	professeur de lycée	1878	AgL1881	Ch
3	10	Picard, Elphège Lucien	1857.12.13	xxx	Fallencourt	Seine-Maritime	76	4	xxx	1879	AgL1882	non
3	11	Delpeuch, Jean Baptiste Édouard	1860.7.24	1930.9.20	Bort (Bort-les-Orgues)	Corrèze	19	3	médecin	1879	AgL1882	Off

リセ・コンドルセの教師たち (前編)

2	1	Quinot, Edme François Nicolas (dit Alfred)	1828.9.29	xxx	Langres	Haute-Marne	52	2	confiseur	1848	AgL1854	Ch
2	2	Mosnot, Louis Émile Jules	1837.5.15	1914.11.23	Troyes	Aube	10	1	marchand épicier	1856	AgL1860	Ch
2	3	Courbaud, Claude	1833.6.27	1899.1.15	Vitreux	Jura	39	4	bourellier	1853	1860, AgL1861	Ch
2	4	Collet, Louis Félix	1838.1.18	xxx	Paris		75	1	xxx	1859	AgL1862	non
2	5	Robert, Léon	1844.2.19	1895.5.20	Sens	Yonne	89	2	charron	1864	AgL1869	Off
2	6	Dauphiné, Mathieu François Oswald (dit Oswald)	1846.5.7	xxx	Ambert	Puy-de-Dôme	63	2	principal du collège	1866	AgL1871	Ch
2	7	Faguet, Auguste Émile	1847.12.17	1916.6.7	La Roche-sur-Yon	Vendée	85	1	professeur de lycée	1867	AgL1874	Off
2	8	Lintilhac, Eugène François	1854.1.5	1920.7.16	Aurillac	Cantal	15	1	marchand de rouenneries	non	AgL1881	Ch